

地図から掘り起こす

地域資源

第1回

飯森山 (酒田市)

東北公益文科大学准教授
松山 薫



東京都出身。お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は人文地理学（近現代の歴史地理学）。主に軍用地や満州開拓に関わるテーマに取り組む。

「地図」という情報の宝庫

ある地域について、そこがどんな所なのか、どのように移り変わってきたのかを知りたいとき、地図は最も頼りになる道具の一つである。近年、TVなどのメディアで地理・地図関連コンテンツが人気となり、地図に関心を持つ層は広がっているという。地理学という学問の世界に身を置く者としては嬉しいことである。

地域の変遷を知りたい場合、地図、とりわけ国土地理院が発行している「地形図」は最強のツールである。文書などの文献資料は、残存状況が断片的で、都市か農村かでもばらつきがある。そこへいくと地形図は明治・大正期から全国をカバーした統一した規格で発行され続けてきたので、どんな場所でもなにかの情報を得ることができる。そうして得た情報の中には、他の場所ではなかなか見ることのできない興味深いものもしばしばあり、それらは地域の宝の再発見ともなりうる。この連載では、そうした特長をもつ地形図を主な題材として、また時には地形図以外の地図も用いながら、地図を眺めて気づいたことをもとに、その地域ならではの物事を深掘りしていきたい。

三角点での意外な発見

初回は酒田市の最上川河口近くの「飯森山」を取り上げる。現在の酒田市の中心市街地は、最上川右岸（ここでは川の北側）に位置するが、そこから対岸の左岸側をみはるかすと、ピーナツを縦に割って伏せたよう



図1 飯森山遠景

な形の小山が目に入る（図1）。これが飯森山である。もとは庄内砂丘の一部だったが、最上川・赤川の度重なる流路の変遷により、削り残されてできたという。一帯は「飯森山公園」として整備され、周辺には土門拳記念館、国体記念体育館、南洲神社などの施設が並ぶ。実は筆者の勤務する大学もすぐ近くで、その住所も「飯森山3丁目」である。

とはいえ、近所で手軽だからという理由で今回ここを選んだわけではない。筆者は2001年に勤務先の大学に着任して以来、地形図を使った演習を1年生を対象に行っており、その初年度からほぼ毎年飯森山には学生を連れて「登山」している。その目的の一つに、山頂にある三角点を実際に見る、ということがある。三角点とは、地図を作るための三角測量に用いる標石のことで、一等から四等までの等級がある。飯森山山頂にあるものは、山形県では21カ所しかない一等三角点のうちの一つである（ちなみに、山形県には福島県と境を接する飯豊連峰の中に、もう一カ所「飯森山」



図2 飯森山とその周辺の地形図
基図は国土地理院「地理院地図（電子国土 Web）」
<https://maps.gsi.go.jp/> における飯森山周辺部
赤の矢印は図1の写真を撮影した方向



図3 飯森山一等三角点（右奥の円の中）と経緯度観測点（手前右の円柱）

という一等三角点がある）。三角測量の際には隣の三角点との間の見通しが必要なため、このような場所が選ばれたのであろう。「一等三角点の記」（基準点ごとの記録を記したもの）によれば、酒田の飯森山三角点が設置されたのは、今から121年前の1898（明治31）年である。

2001年、私が初めて酒田市の飯森山に登った時に驚いたのは、三角点の標石の脇にあったコンクリートの円柱と、その説明板（図3）の存在であった。高さ55cmほどのコンクリートの円柱の側面には、金属のプレートが取り付けられており、「経緯度観測点 昭和三年七月～八月 文部省測地学委員会」等と刻まれていた。さらに、その脇の酒田市が建てた説明板には、この「経緯度観測点」は「大陸移動説を検証するため」に、飯森山・飛鳥・三崎山の三点に設けられたもので、「大陸移動説」はドイツの気象学者ウェゲナー（1880～1930）が唱えた「現存する大陸は、一つの大陸塊から分裂して現在の位置に移動したもので、これからも移動し続ける」という学説であると記されていた。「大陸移動説」は、かつて小学校高学年の国語の教科書に「大陸は動く」というタイトルで掲載されていたので、ご記憶にある方も多いただろう。ウェゲナーの存命中は、大陸を動かす原動力が解明できなかったゆえに批判された説だが、第二次世界大戦後のプレートテクトニクス理論の提唱により、結果的に見直されたものである。

学生と一緒に、どこにでもあるというわけではない一等三角点を見ようという軽い気持ちで初めて登った飯森山だったが、その時は、なんだかすごいものに酒田で出会ってしまった、という気がした。なお、円柱の側面の金属プレートは、その3、4年後になぜか消失しており、現在は何も文字の刻まれていないプレートがつけられている。

寺田寅彦と大陸移動説

さらに、この観測に関わった人物として、寺田寅彦（1878～1935）というビッグネームが出てくる。寺田は地球物理学者であると同時に随筆家としても活躍し、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句の原型を

生んだことや、『吾輩は猫である』の「寒月先生」のモデルであることでも知られている。「大陸移動説」を日本海で検証することを寺田が主張した結果、前述のように飯森山のほか、酒田港の沖合39kmの日本海に浮かぶ飛鳥の柏木山、山形県との県境にごく近い三崎山（現・秋田県にかほ市）にそれぞれ測地学委員会によって同様の円柱が子午儀の台座として作られ、1928年、1934年、さらには戦後にも天文観測による経緯度の測定が行われた。ただ、観測結果は必ずしも寺田の仮説を実証するものではなかった。現在、柏木山、三崎山とも一等三角点の脇に飯森山同様の円柱が残っている。本稿では「円柱」と書いてきたが、観測当時の論文には「ピア」（pier）、「点の記」には「天測台」と記されている。なお、地殻の変動に関することでは、2011年の東北地方太平洋沖地震は多くの基準点に改測・改算をもたらした。飯森山三角点も、最も新しい紙地図の1/25,000地形図「酒田南部」（2006年発行）では標高が41.8mだが、図2のウェブ上の地図では2014年の改算が反映されて41.6mとなっている。

畑から都市公園へ

最後に、現在は酒田市の大規模な都市公園として整備され、人々の憩いの場となっている飯森山が、かつてどんな姿だったかを空中写真で見たい。図4は、1952年に米軍が撮影した空中写真である。ナマコのような形をした飯森山のかなりの面積が、農地として利用されていることがわかる。現在アスレチック遊具がある場所（図2の荒れ地の記号「縦の三本線」のあたり）も畑だったのである。他の庄内の砂丘地と同様、砂地を農地化した先人の努力がうかがえる。ただ、東側3分の1程度は現在同様樹木に覆われている。その中で、白い点として見えているのが三角点とその周辺である。

このように飯森山は、単なる目立つ小山というだけではなく、その立地特性を生かして測地学史上に残る観測の舞台となった。酒田のランドマークは、貴重な測地観測遺跡でもあるのである。

（東北公益文科大学准教授・松山 薫）



図4 1952年の飯森山
基図は国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」
<https://mappp.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1> より
撮影：米軍 1952年10月27日、USA-M171-2-77